

都市計画の礎いしづえとなった縮尺模型

森ビル 都市模型



見る人を魅了する都市模型

スマートフォンの地図アプリを開けば、いつでもどこでも電子地図や航空写真、3Dで立体的に表現された街など手軽に見ることができるようになった昨今、以前より我々の生活の中に地図や街のカタチや配置が入り込むようになってきました。そんな中、多数の芸能人も感嘆したという普段は一般公開はされていない森ビル制作の都市模型を拝見できる希少な機会を得て、弊社の参加希望者と共に見学してきました。現実を縮小したとしか思えない、スマートフォンでは体感できない圧倒的な存在感を目の当たりにした取材の様相をレポート致します。

2016年3月取材

森ビルが作った1000分の1スケールの東京・ニューヨーク・上海



東京の港区を中心とした1000分の1スケールの都市模型

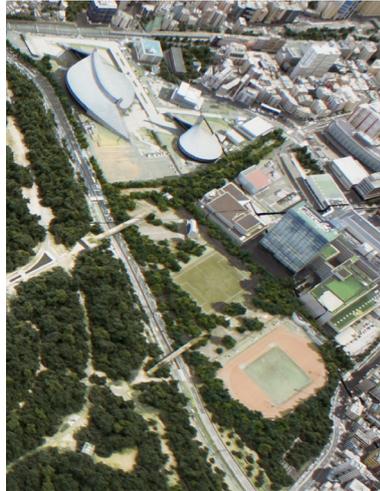
六本木ヒルズの高層階に広がる東京・ニューヨーク・上海の都市模型。中でも東京を再現した都市模型は約17メートル×約21メートルという、クオリティだけではなく、大きさでも圧巻の風景が広がる。そもそも何故、このような都市模型を森ビルが作ったのか。平成11年、森ビルの故森稔元会長が都市問題に関心を持ってもらうためにクオリティを追求したリアルな模型の制作が必要と考えたことがきっかけ。模型にすることで言葉で説明するよりも街の問題がイメージしやすくなる。その後、東京都による2016年のオリンピック誘致の際に、石原元都知事より依頼を受け、競技会場を計画していた江東区などの湾岸エリアを制作。その後も拡張を続け、現在の大きさになった。模型の制作方法はまず資料の収集から始まる。航空写真・都市計画図・住宅地図をはじめ、実際に現地におもむき、建物や交通標識から看板まで撮影をし、画像を収集する。その画像を加工し、建物のテクスチャを施した後、スタイロフォームというポリスチレン樹脂性の発泡体を建物型に切り取り、テクスチャを貼り付ける。地盤は高低差を1メートル単位で等高線に沿って積み重ねていき、航空写真をその上から貼り付ける。出来上がった地盤の上に建物や樹木、交通標識などを設置していき、縦横のスケール感だけでなく、高低差という高さの概念も踏まえた1000分の1の都市模型が完成する。建物のテクスチャや交通標識などはカテゴリ毎にデータベース化をしている。



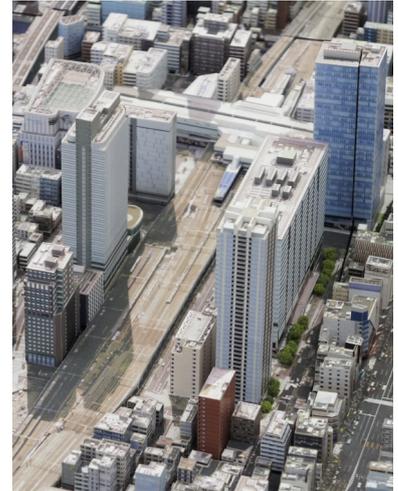
都市模型から覗く街のカタチ



アサヒ・アートスクエアを隅田川側から



国立代々木競技場と代々木公園



秋葉原駅周辺



新宿パークタワーより都庁を臨む



ニューヨークの街並みをセントラルパークから



上海環球金融中心から黄浦江へ

総括

同行していたマーキュリー社員に「どこの地域が見て一番驚いた？」という単純な質問を投げかけてみた。返ってきた言葉で一番多かったのは弊社のオフィスがある新宿都庁前付近や新宿住友ビルであった。毎日見ている景色がそのままのカタチで小さくなっていることに驚くという点と毎日見ているアラ探しをしようと思えば容易にできる景色にも関わらず、アラが無く余計にその凄さを目の当たりにしてしまうことにさらに驚愕する。現在森ビル制作の都市模型はその都市のCG化であるVR（ヴァーチャル・リアリティ）の制作も同時におこなうことで製作コストを縮小している。しかし、どんなに時代が変わっても圧巻のリアリティをもたらしている、この都市模型が導く驚きや発見は時代が変わっていても普遍だと思える。都市模型を通じて都市問題に関心を持って欲しいと考えた森ビル先代の社長である森稔氏が伝えたかったことを人間の想像力を発揮しやすくしている都市模型を前に、マーキュリー社員として、都市のマーケティングの一端を担っている会社の一員として深く考えるきっかけとなりました。現在こちらの都市模型は一般公開はされていませんが、「ヒルズ街育プロジェクト」として限定公開されたり、受託制作の依頼受け付けなどをされているようです。 小山

お問い合わせ

ヒルズ街育プロジェクト

<http://www.mori.co.jp/machiiku/>

都市づくりのコミュニケーションツール

https://www.mori.co.jp/company/urban_design/urbanlab/

